祝 大の里横綱昇進

校　長　　武井　正明

昨年の初場所は、まだ髷さえ結えていなかった。史上最速の大出世だ。
私の父は上越柿崎の生まれ。高校も地元高田農業だったから、海洋高出身の大の里への親近感は特別だった。大の里は、親父がずっと応援してきた贔屓の力士だ。
取組を終えて支度部屋から引き揚げてくる通路の途中で、どさくさに紛れて父は、別のファンと記念写真を撮っていた大の里に、なりふり構わず割って入って握手を求めた。
あまりにも手を離さないので、参ったなあと、大の里は苦笑いを私に向けた。

あれから１年５か月あまりの月日が経った。
父の大相撲観戦は、今年の初場所がおそらく最後になる、だろう。
当時前頭 15 枚目だった大の里は、このわずかな期間で今や角界を背負って立つ大関となり、三月大阪場所で優勝し、横綱を狙えるまでに逞しく大きく成長していた。
親父は大の里に対して手厳しい。「まだまだ強引だね」「研究されているね」でもその眼差しには、孫に向けるような優しさと期待感がにじみ出ていた。

そして横綱昇進の懸かった今場所。大の里は 12 戦全勝で圧倒的な力を見せつけ、早くも金曜日、優勝に大手をかけていた。
その日の午後、父は緩和病棟に移動した。入院すると急激に衰え、普通の 87 歳のおじいちゃんになった。もうスポーツ新聞を広げて読むことは叶わない。長い間ここまで、もう十分頑張ってくれた。年長者から順に逝くのはあるべき流れだ。覚悟はできている。

優勝の懸かった大一番は、ちょうど面会に来てくれた従妹夫婦と４人で観た。
親父は、大の里の優勝を耳許で知ると、驚いたことに両手を挙げて万歳をした。いつものサービス精神旺盛な親父が、一瞬戻ってきた。
ワインと日本酒、どっちにする？ ワインの方に頷いた。
口許に持っていくと、うまそうにゆっくり何度か頷きながら笑顔で舐めてくれた。残された時間、こんなひとときが、少しでもあることを願う。

大の里関、優勝おめでとうございます。そして横綱昇進も、私の親父は我が事のように喜んでいます。新横綱は、能登をはじめ、父と同じような状況や、復興に歯を食いしばっている方々の、そして日本中の大の里ファンの人たちの、大きな希望になっています。
令和７年５月 28 日。大の里関は、相撲界の神様となった。

神様、私たちに幸せな時間を、本当にありがとうございます。
横綱が優勝を決めたこのひとときを、私たちは生涯忘れません。